

## 療養型病院での看取り

室蘭市医師会  
皆川病院

### 渋谷 均

市立室蘭総合病院で外科医として30年以上診療に従事してきた私は退職後、療養型病院に勤務することになりました。ここは登別市にあるベッド数84床（医療療養型54床、介護療養型30床）の医療法人社団楽生会皆川病院です。

地域医療情報システム（日本医師会）によると、西胆振地区は2015年の統計で人口189,696人、65歳以上の年齢割合は34.6%で、全国平均26.6%に比較し高齢化が進んでいる地域です。2020年には人口177,562人、65歳以上36.0%と予想されています。高齢化社会を反映し、当院に入院している患者も超高齢者が多く、その疾患もさまざまです。2019年1月4日時点における療養型病棟入院患者51名の平均年齢は85.9歳（90歳以上21名：41.2%）、介護型病棟30名で87.5歳（90歳以上14名：46.7%）でした。高齢者は何らかの基礎疾患を有しており、肺、心、腎、脳疾患などで急性期病院に一旦入院するとADLは著明に低下し、自立できず、家族内マンパワー不足の問題もあり、自宅退院が極めて難しくなる傾向にあります。国は医療費削減の政策として在宅診療、訪問看護、訪問介護などを積極的に推し進めていますが、この地域ではなかなか思うようにいかないのが現状です。そのため急性期病院で治療を受けた後、自宅退院できない高齢患者はリハビリテーションを兼ねて当院に紹介されてきますが、その多くは終末期の状況にあります。最近では癌の終末期患者を診る機会が多くなりました。西胆振地区には緩和ケア病棟が2ヵ所ありますが、受け入れ人数的にはまだ十分とは言えない状況にあり、多くの患者は一般病院で亡くなっています。私は市立室蘭総合病院で緩和ケア研修会を主催し、ファシリテーターをしていましたので、癌の終末期患者を受け入れ、看取ることが多くなりました。

当院療養型病棟には現在51名中11名（21.5%）の癌患者が入院しており、6名は治癒していますが、5名は担癌状態で終末期の状況にあります。介護型病棟では30名中4名（13.3%）の癌患者がいますが、治癒していると思います。

当院には、癌以外にもさまざまな疾患により終末期を迎える患者を多数受け入れてきました。そのため、当院では毎年40名以上の患者が亡くなります。昨年は41名が亡くなりました。41名のうち14名（34.1%）は癌患者で、そのうち弱オピオイド（トラマドール）を投与した患者は3名、また強オピオ

イド（オキシコドン、塩酸モルヒネ注など）を必要とした患者は3名で、計6名の患者に癌性疼痛対策が必要でした。

2007年にがん対策推進基本計画が策定されましたが、それ以降PEACE PROJECTにより癌を扱う医師の多くが緩和ケア研修会に参加したことにより、癌患者に対するケアのスキルは向上したと思います。今後は療養型病院でも終末期癌患者の看取りがますます必要になると思います。しかし、癌患者を診療していてもオピオイドを使用しないと医療区分が上がらない、またその区分も低いことに関しては納得がいかず、国には医療区分の改善を望みます。

終末期患者の看取りでもう一つ触れておきたいことは、皮下輸液法です。終末期の患者ではport造設などで血管確保ができていれば良いのですが、多くの場合末梢血管での血管確保が難しい、あるいはすぐに漏れてしまうなどお上げの時があります。しかし、このような状況下でも、家族の想いは患者に少しでも長生きしてほしいとの期待があります。われわれ医療者はその期待に応えなくてはならないことがあります。皮下輸液法はこのような時に非常に有効です。具体的にはソリタT3など薄めの輸液500mlぐらい（1ml/分）を皮下注射することで患者の循環動態が保たれ、生存期間が延長します。輸液量は1日1,000mlぐらいまで可能です。この輸液法により、30日以上生存した患者もいます。参考になれば幸いです。

